〈小学生部門〉

心の輪を広げる体験作文　最優秀賞

ぼくのおじいちゃん

宇都宮市立中央小学校　三年　森田（もりた）　智仁（ともひと）

ぼくには、しょうがいがある家族がいます。それは、おじいちゃんです。

ぼくのおじいちゃんは、ぼくが五才の時にのうの病気で左半身が全く動かなくなりました。

おじいちゃんが、たおれた日はようち園の運動会でした。ぼくは、心ぱいであわてて、病いんに行きました。おじいちゃんは、しずかにねていました。手をにぎったら、あたたかかったので安心しました。でもなかなか目をさましませんでした。

意しきがもどって、話が出来るようになるまで三か月が過ぎていました。おじいちゃんは、自分がなぜ入いんしているのか理かいしていませんでした。そして、自分の体が思うように動かないことで、こんらんしているように見えました。

ぼくは、お父さんやお母さんといっしょにおじいちゃんを、さん歩にさそったりしました。元気になってもらいたかったからです。でも、おじいちゃんはこんなことを言いました。

「外に出ると、自分のことをかわいそうだという目で見られているようでつらい。」

ぼくは、この時、何か大切なことを教えてもらったような気がしました。ぼくは、おじいちゃんのことを、かわいそうだと思って、たくさん手伝ってあげたりしていたけれど、それは、本当におじいちゃんの元気につながっていたのかな。

この言葉をきっかけに、ぼくは、左半身が不自由なかわいそうなおじいちゃんではなく、体にうまく動かないところはあるけれど昔から変わらないぼくのおじいちゃんとしてせっするようになりました。

ぼくは、それまでしょうがいのある人たちをつい注目して見てしまっていました。かわいそうだと思って、何でもしてあげることが親切だと思いこんでいました。でも本当にそうかな。しょうがいがあるから、とくべつなのではなく、しょうがいがあっても、しぜんに受け入れる気持ちが本当の親切じゃないかな。なかまであることは同じなのだから。

おじいちゃんは、病いんの先生やかんごしさん、かいごしさん、リハビリの先生にお世話になって、元気になりました。いつも、みんなは、え顔でした。おじいちゃんと話す時も、ぼくと話す時も、家族と話す時も同じでした。

おじいちゃんは島めぐりがしゅみでした。今はしゃしんや本をみて、その時のことを思い出して、きこうを書いています。落ちこんでいたころにくらべて、よくわらい、会話もたくさんできるようになりました。ぼくにとってのきせきは、おじいちゃんの体が元通りになることじゃない。おじいちゃんらしく、えがおでいてくれることが何よりも、うれしくてしあわせなのです。

ぼくは、おじいちゃんのおかげで、たくさんのことを学びました。しょうがいがあっても、おじいちゃんであることにはかわりはないということ。だから、ぼくは、これから、しょうがいがある人もない人も、かべが出来ないような社会にしたいと思いました。

今日も、せっせと何かをしている元気なおじいちゃんは、ぼくのじまんのおじいちゃんです。

心の輪を広げる体験作文　優秀賞

ぼくの小さな弟

鹿沼市立東小学校　二年　Ｉ・Ｋ

ぼくは六人かぞくです。今年の一月に弟が生まれました。四人きょうだいになりました。いちばん小さい弟は、ダウンしょうこうぐんで生まれてきました。さいしょにお母さんから「ダウンしょうは一生なおらないびょうきだよ。」とおしえてもらいました。とてもこわかったです。

三月二十一日は「せかいダウンしょうの日」で、かぞくでイベントにさんかしました。まだ二か月の小さな弟をお母さんがだいていました。マシュマロみたいにやわらかい弟。ぼくはまだよくわかりませんでした。

まい月ダウンしょうの人たちとリトミックをしています。音楽にあわせて手足をうごかしたり、ピアノにあわせておどったりハンドベルでえんそうします。きれいな音が出せてあそべて楽しかったです。

夏にダウンしょうのおまつりがありました。大きなホールでうたをうたったり、ダンスをしているところを見ました。手や足のいろいろなうごきがすごかったです。そこで、車いすにのったり小学生くらいの人が大きなミルクをのんでいたのでびっくりしました。今まであった人とちがったからです。

夏休み中、でん車にのってとうきょうの大きなびょういんに行きました。家からすこしはなれた大学びょういんにも行きました。お母さんと小さい弟といっしょにリハビリセンターに行きました。弟がおもちゃをさわろうといっしょうけんめいうごいたり、り学りょうほうしの人とバランスボールでとんだりはねたりしています。弟がすこしずつうごけるようになってうれしいです。

ぼくは、小さい弟をかわいいと思っています。さいしょにお母さんから「一生なおらないびょうきだよ」といわれてこわかったきもちは、いまはすこしおちつきました。弟がうごけるようになり、声を出してわらったりしてくれるからです。しょうがいをもった人とふれあって、まだよくわからないけど、ぼくが知らない人もがんばって生きているんだなと思いました。弟はまだ小さいからぼくが弟をまもってあげたいです。

心の輪を広げる体験作文　優秀賞

私と障がいがある妹

小山市立小山第一小学校　六年　中村（なかむら）　桃々（もも）

私には二人の妹がいます。今回は二人目の妹のことについて書きたいと思います。

私の二人目の妹はとても元気でかわいい自慢の妹ですが、ダウン症という病気があります。ダウン症とは見た目や発達のスピードに特徴があり、生まれつき心臓や消化器の働きが悪かったり、他の病気にかかりやすかったりすることがある病気です。二人目の妹はどちらかと言うと、発達のスピードがおそいという症状が出ています。確かに妹とこれまで過ごしてきて、みんなより背が低く歩けるようになるのが遅かったり、いまだに何をしゃべっているのか分からなかったりします。また、指を口にくわえることもあります。でも少しずつ、少しずつ明らかに成長していっているのを日々実感しています。１センチ背が伸びたり、はっきりしゃべるようになったり、自分で指をくわえているのに気づいてやめたりなど様々な成長が見られます。来年、妹は小学校にあがります。発達障害がある妹が学校の授業についていくのは、大変だと思います。だから特別支援学級の方に入ると思いますが、それでも難しいことはあると思います。これから先、妹は他の人たちよりもここでは書き表せないくらいたくさんの苦労や大変なことがまっていると思います。だから、私も協力して、勉強面、生活面やお手伝いなどいろいろなことを教えてあげたいと思っています。

妹よりも少ないだろうけど、私も妹に関することで、大変なことが待っていると思います。でも「姉」としてがんばっていきたいと思います。そして、妹が、ようち園、小学校、中学校、高校、最後に大学を無事に何事もなく終わることができたなら思い切り抱きしめて、褒めてあげたいです。この世界が少しでもダウン症や他の障がいをもった子たちが過ごしやすく、生活しやすくなるようになって欲しいと思います。そういう障がいをもった人たちが生きていくことができるような平和な世界になってくれることを願って、これから生活していきたいと思います。

心の輪を広げる体験作文　佳作

りょうごえんとのこうりゅうかい

小山市立小山第一小学校　一年　岡本（おかもと）　莉緒菜（りおな）

わたしのかよっていたほいくえんのとなりには、りょうごえんがあります。ねんにすうかいりょうごえんにいって、いっしょのじかんをすごします。まいあさほいくえんにいくと、そとにいるりょうごえんのひとは、おおきなこえでさけんでいたり、おこっていたり、さいしょはこわいひとだとおもっていました。でも、ほいくえんのせんせいは、こわいひとたちじゃないとおしえてくれました。

わたしたちは、こうりゅうかいではっぴょうするだんすをたくさんれんしゅうしました。こうりゅうかいのひ、すてえじにたつと、めのまえにはくるまいすにのるたくさんのひとがいました。すごくきんちょうしたけれど、はっぴょうがおわるとおおきなはくしゅと、「じょうずだね。」とやさしくこえをかけてくれました。そのときわたしは、こえはおおきいけれど、はなしてみるとやさしいなとおもいました。それからあさ、そとであうときはあいさつができるようになりました。みんながあいさつをかえしてくれるわけではないけれど、てをふってくれたり、わらってくれたり、すごくあたたかいきもちになります。

ほいくえんのとなりにりょうごえんがあったこと、こうりゅうかいにさんかできたこと、やさしさをしれたこと、わたしにとってはたいせつなおもいでになりました。ほいくえんはそつえんしたけれど、これからまたりょうごえんのひとたちみたいなひとにであうことがあったら、わたしはおなじようにあいさつをしたいです。

わたしがそうだったように、さけんでいるから、おこってみえるから、すこしちがうからとさけてしまうひとがいなくなればいいなとおもいます。りょうごえんのひとみたいなひとたちが、さべつされて、かなしいおもいをしないようなまいにちになりますように。

心の輪を広げる体験作文　佳作

障害をもつ人のためにできること

那須町立東陽小学校　六年　安達（あだち）　暖大（はるた）

私の家族には障害者がいない。障害に興味をもった事もなく、私には関係ない事だと思っていた。しかしある出来事をきっかけに私の気持ちがガラッと変わった。

ある日、いつものようにショート動画を見ていると「チック症」について動画を出しているチャンネルを見つけた。そのチャンネルは、「チック症」にかかっている人を中心に動画投稿をしていた。私はそのチャンネルをきっかけに「チック症」について興味をもち、チック症について調べることにした。

そもそもチック症とは、まばたきや咳払い、首振りや奇声が本人の意思に関係なくくり返してしまう疾患であり、チック症の原因ははっきりと分かっていないようだ。チック症はもう一つトゥレット症などの名前もあるそう。チック症は子どもから大人までかかる可能性があるようだ。

私はこれらの事を調べたら「チック症」や、「障害」についてとても興味をもつようになった。自分も最初は、「チック症」という名前についてなにも知らなかったし、障害にも全然興味がなかったけど一つのチャンネルでガラッと変わった。

私はそのチャンネルの動画のコメントらんを見てみた。きっとチック症の人への応援メッセージなんだろうと思ってコメントらんを開いてみたら、私の予想は大きくはずれた。コメントには、「おつかれ」や、「さっさと消えろ」等投稿者をきずつけるような言葉がたくさん書きこまれていた。障害がある人は障害者になりたいと思って生まれてきた訳じゃないのになんで悪口を言われなきゃいけないの？とても不思議に思った。自分にできる事はないのか、それは「障害」について多くの人に伝える事だと思う。ＳＮＳやポスターなど、伝える方法はたくさんある。

私のように最初は障害などに「一つも興味がなかった。」と思っていたけど何かをきっかけに、「こんな障害があるんだ。」など思う人が一人でも増える事を心から願っている。

心の輪を広げる体験作文　佳作

分かろうとする気持ちの大切さ

足利市立毛野小学校　五年　大木（おおき）　奏太朗（そうたろう）

ぼくは卓球を始めた。背の小さい男の子が耳になにかつけている。最初は何をつけているのか分からず、ぼくはいつもと変わらず男の子に話しかけた。しかし男の子から答えが返ってこなかった。その時は何も分からず、「ぼくの言っていることが分からなかったのかな。ぼくの声が聞こえなかったのかな。」と思った。

また次の練習に行った日、男の子は手でジェスチャーをしていた。「あれっ、もしかしてあの子は耳が聞こえないのかもしれないなあ。」と、思った。

そして、今日は、男の子の様子をよく見ようと思った。すると、男の子は卓球を指導者から教わる時に、一生けん命目で見て動きを分かろうとしていた。その時にぼくは確信した。

「耳がよく聴こえないのだ。可愛想だなあ。」この時はぼくの中で可愛想としか思えなかった。母親にも、

「あの子見て。耳が聴こえないよ。」

と伝えた。もうこの日は、練習より男の子しか目に入らなかった。練習が終わり家に帰っても、男の子のことが頭からはなれなかった。

卓球場にむかう車の中で、先週の男の子の事を思い出した。またあの男の子いるかな。今日男の子に話しかけてみようかな。卓球場に着くと、男の子はお父さんと練習をしていた。男の子のお父さんも、男の子と一緒で耳に何かをつけている。お父さんは男の子にジェスチャーをしながら教えている。男の子もお父さんの姿をよく見てうなずいている。ぼくは勇気を出して大きな口を開けて男の子に

「一緒にやろう。」

と話しかけた。すると男の子は、うなずいてくれた。ぼくが分からないことは、指を差して教えてくれる。ぼくが話しかけると口元を見て、ジェスチャーか指差しで答えてくれる。ぼくはいままで男の子のことを分かろうとせず、可愛想と思っていたことが初めてはずかしくなった。それからは、男の子の肩を叩いて知らせたりぼくなりに指を差して教えたりジェスチャーをしたりした。また、タイミングを合わせながら、ジャンケンをするようにした。そして母から、男の子と男の子のお父さんの話を聞いた。

「男の子と男の子のお父さんは耳が聴こえにくいから、耳に補聴器をつけているんだよ。補聴器は音や耳が聞こえにくい方の耳をサポートしてくれる機器だよ。上手く話すことができないから、手話をして相手に伝えたいことを伝えているんだよ。」

ぼくはその時初めて補聴器の存在を知った。ぼくは、生活をしてきた中で音できけんや、声のトーンで相手の気持ちに気づいていた。

しかし男の子は表情か口元を見て、相手のことを分かろうとしている。今のぼくにできることは、笑顔でせっすること、ていねいに伝えてあげることだ。

男の子から学んだことを、今度は、ぼくが少しずつ恩返ししていきたい。

心の輪を広げる体験作文　佳作

障害あるとない

足利市立毛野小学校　六年　山井（やまい）　優芽（ゆめ）

「すごい。」私は心の中でそうつぶやきました。私が四年生の時、目が見えない、耳が聞こえないなどの障害をもつ方々に、授業で障害について教えてもらいました。私は目をつぶって歩いても転ぶ。私は耳をふさいで友達と話そうとしても聞こえない。だけど障害のある方々はそれも乗り越えて、障害の無い人とほとんど変わらない生活をする事が出来ているという事が私にとって、おどろきでした。もちろん全員が安定した暮らしをしているわけではありません。一人では生活することが難しい方も多くいると思います。そして、障害に対する社会の理解がうすい。それも大きな問題です。障害にはこのように目が見えない耳が聞こえない手足が不自由などの身体障害だけではなく、他にも知的障害、精神障害などの障害があります。知的障害とは、生活に関わる能力の発達に、支障が出ている状態のことです。精神障害とは、日常生活や社会参加が困難になっている状態のことです。知的障害、精神障害の方々は、困っていても障害をもっている人だと思われにくいので、助けてほしくてもなかなか助けてもらえません。ですが、障害のある人の生活を手助けするための道具も多くあります。目に障害がある人が使う白杖、義眼、眼鏡。耳に障害がある人が使う補聴器。手足、体に障害のある人が使う義肢、装具、座位保持装置、車いすなどたくさんあります。そして障害のある人がこの道具を使うのは、障害がある人、ない人関係なく、家で生活をし、街に出て散歩をしたり買い物をしたり、家族や友達と話したり遊んだり、自由な生活を送りたいからだと思います。

障害を持つ人も、障がい者になりたくてなったわけではありません。今、この世界は何でも簡単に分けてしまいますが、そうではなくて、障害があってもなくてもみんなで助け合いながら、安心して生活のできる世の中になってほしいな、と思います。